kelo Associated Repository of Academic resouces	
Title	『ジャップの収容所』紹介:第VIII部
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part VIII
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	2007
Jtitle	共立薬科大学雑誌 (The journal of Kyoritsu University of Pharmacy). Vol.2, (2007. 3) ,p.65- 81
JaLC DOI	
Abstract	During WWII, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period. The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Professor. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp. The text used for translation is Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley, 1978 & 2004, CSUF. The title of the book was originally Jap Camp and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. A couple of interviews will be introduced in this article. One interview is with a homemaker who was from Los Angeles and the other with a male automobile dealer. When the war broke out, they were both in their midthirties. Their surname was Miller, which is coincidental and does not mean they were husband and wife. Readers might refer interest to another book, Roger Axford, Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.
Notes	著書・訳書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=jkup2007_2_065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャップの収容所』紹介

—第哑部—

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley

—Part Ⅷ—

池田 年穂 Toshiho IKEDA

During WW II, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been conducted. It seems, however, to be rather difficult to find documentation of interviews with 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

The California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Professor. Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley, 1978& 2004, CSUF. The title of the book was originally Jap Camp and was changed to the title above due to opposition and charges from a group of Japanese-American militants. A couple of interviews will be introduced in this article. One interview is with a homemaker who

was from Los Angeles and the other with a male automobile dealer. When the war broke out, they were both in their mid-thirties. Their surname was Miller, which is coincidental and does not mean they were husband and wife. Readers might refer interest to another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees and whose translation was published by me in 1991.

緒言 CSUFのオーラルヒストリー・プログ ラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生した お陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器 の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校(CSUF)のオーラルヒストリー・プログラムは、1966年に講義形態として始まり、翌1967年に公的に発足している[山倉明弘は、『史學』第六七巻、第二号(1998年3月)の27頁で、下記のように述べている。

一日系米人の体験に関するオラルヒストリー採取が一九六〇年代に始まり、七〇年代にはいくつか

優れた研究が発表されたというものの、一九八○年 代までは強制収容体験者自身の忌まわしい過去を 忘れたいという抑制のおかげでオラルヒストリー 採取の作業はそれほど進まなかった。その流れが劇 的に変わるのが、一九八○年代である。アーサー・ ハンセンはカタルシスとなった出来事として、(一) 戦時強制収容は米国政府の主張してきた軍事的必 要性でなく人種偏見、戦争ヒステリー、政治的指導 性の欠陥が原因であったという一九八二年のバー ンスタイン委員会報告、(二) その報告に基づいて バーンスタイン委員会が一九八三年に行った国家 謝罪と一人二万ドルの賠償の勧告の二つを挙げた。 それ以来、続々とオーラルヒストリー採取とそれを 基にした研究が進んでいる。...池田註]。ケー スによっては 20 時間にまで及ぶ 2,000 人近い個人 とのインタビュー、延べにして 3,500 時間以上の テープが保管されている上、48,445 頁の文書として 記録されている。インタビュイーらのインデックス も、504 頁にのぼる Shirley E, Stephenson, Oral History Collection, 1985 (以下OHCと略記) として まとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972年にアーサー・A・ハンセンを長としてから、より精力的に進められる事となった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー(『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる)の数々である。筆者の調べでは、インタビュイーは140人(同席者は除く)、インタビューの時期も1966年から1984年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

1966年 6名、 1968年 1名、 1971年 6名 1972年 9名、 1974年 13名 1973年51名、 1975年 3名、 1976年17名、 1977年 1名 1978年16名、 1979年 2名、 1981年 3名 1982年 3名、 1983年 4名、 1984年 5名 (不詳1名、1981年3名の内1名は1982年にもイ ンタビューを受けている)

男 86 名 女 53 名 (不詳 1名)日系 90名非日系 50名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、 日系米人のみでなく白人(コーケイジァン)、それ も強制収容に直接には関わっていなかった一般市 民へのインタビューが多数含まれている事である。 第二次大戦中 10 あったリロケーション・センター の内、最も名高いのは、最初のセンターでもあった マンザナーであろう (それに次ぐのが、合衆国政府 への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレー クかと思う)。マンザナー収容所が事前の予告もな いまま建設された地元のオーウェンス・ヴァレーの 住民、ほとんどはそれ迄日系米人に関心すら抱いて いなかった住民の反応をうかがうのに最適なイン タビューが、無論インタビュイー各々の収容所や被 収容者への意識や関わりにはかなりの深浅があり はするが、このCSUFのオーラルヒストリー・プ ログラムのコレクションの中にいくつも見出し得 る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のもの が最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三 国でオーラルインクァイアリーを試みてきたが、年 月と共に体験者が物理的に存在しなくなったり、知 的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多 な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験 のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を 自分の人生のパースペクティヴの中にではなく歴史 のパースペクティヴの中に過度に整理して配列し たり「合理化」したりする事も、ある程度は避けら れない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を 高めようという意識からか、年月日等ディテールに 非常なこだわりを見せる事もある。但し、インタ ビューはインタビュイーの話の矛盾を指摘する事 に目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のない まま録音されていく事になる。更に、インタビュ アーが白人であるか日系であるか、はたまた日本か ら来た研究者であるかにより、インタビューの内容 にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、イ ンタビュアーの側の視点や態度もインタビューの 成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタ

ビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュイーを誘導したり、質問の内容を自主規制する事もあり得る。これは1991年に筆者が翻訳を刊行したRoger Axford, Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out, 1986、邦題『リロケーション―日系米人強制収容の証言』西北出版、の「訳者あとがき」にも記した事だが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会学的なレファレンス・グループの求め方によっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」 という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミ ノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」 という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナ ルド・ラーソンは1977年、第二次大戦中にオーウェ ンス・ヴァレーの住民だった白人達(1人、夫妻の 内の妻の方が中国系)へのインタビューを 20 抜き 出して Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley として刊行した。ところが、これは 元々Jap Camp、『ジャップの収容所』というタイト ルであり、そのタイトルで広告もうたれていたもの が、前年 1976 年に一部の日系市民活動家からの強 硬な申し入れにより変更されたものである。その顛 末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな 問題と重ね合わせる事も出来ようが、詳細の紹介は 他の機会に譲る事とする。

合衆国の 60 年代は、公民権運動、ベトナム反戦 運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろ うが、ジャップという言葉を用いるのは (ニップも 同様) その時代背景の中では当然忌避されるように なっていた。それでも、例えばアグニュー・メリー ランド州知事の 1968 年の副大統領選挙キャンペー ンの途中での日系二世ジーン・オオイシに対する 「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失 言」事件もおきている (詳しくは、当事者により、 In Search of Hiroshi, 1988、翻訳は『引き裂かれたア イデンティティ』染矢清一郎訳、岩波書店、1989 年、の中に書かれている)。本稿での「ジャップ」 発言については、考察と結語で触れる事とする。

本文

本稿では、男女一名ずつ二名のコーケイジァンと のインタビューを紹介する。

なお、(18)、(19)は、「『ジャップの収容所』 紹介」第一部からのインタビュイーの通し番号に なっている。二人共に姓はミラーであるが、夫婦で はない。

(18) ポーリーン・ミラー

ポーリーン・ミラーとのインタビュー。Mがインタビュイーのポーリーン・ミラーをさす。 Hがインタビュアーのアーサー・A・ハンセン、Bが同じくインタビュアーのデイヴィッド・バータニョーリをさす。インタビューに同席したミラー夫人の夫(ファーストネーム、ミドルネームは不明)は、M氏として表す。

H:ミラーさん、あなたの個人的なバックグラウンドについていくつか質問する事で、インタビューを始めたいのですが。第二次大戦が勃発した時に、あなたは大体おいくつでしたか?

M:35歳くらいだったわ。

H: その前もかなり長い間オーウェンス・ヴァレー にお住まいだった?

M:11年間ね。

H:ローンパインにいらした時には結婚されていましたか?

M: ええ。

H:ご主人は何をなさっていましたか、職業ですが?

M:車の販売店とガソリンスタンドを買ったのよ。

H: あなたが初めてやって来られた時に、ローンパインのことをどう思われましたか?

M:神に見放された土地だと思ったわ。(笑い)でもこの土地に暫くいたら―わたしは都会から来たでしょう、こんな小さな町に来るんで友達みんなと離れたわけだし―そんなに日が経た

- ぬ内になじんでしまって、この町がとても好き になったのね。
- H:1942 年にマンザナー収容所が出来る前に、日本人、中国人、フィリピン人が、誰かこのローンパインに住んでいたのをご記憶ですか?
- M: いいえ。
- H:こちらに来られる前に住んでいたところで、ア ジア系アメリカ人と接触がおありでしたか?
- M: ええ、元はロサンゼルスに住んでいましたから、 勿論、あちらにはいくらかいましたよ。実際は、 たくさんいたわね。
- H:個人的に誰かを知っていた事は?
- M: それはないわね。マーケットやそんな場所で顔 見知りになるというところね。その辺りのあち こちに集まって住んでいたわね。とても良い人 達だったわ。
- H:とてもたくさんの一何千という数の日系米人を 収容するという可能性があることに、いつ頃初 めて気付かれましたか?
- M: そうね、とても短兵急だったのよ。つまり、だって一戦争みたいだった。 それでこんな事が始まって、そうなると落ち着いてそういった事態を考えようともしないものよ。 実際のところ、それに気付く前に、彼らはここに来ていたのよ。
- H: そもそも、マンザナーにやがて収容所が出来る という噂があった事をご記憶ですか?
- M: それはそうよ。噂はあったわ。そして、わたし の言った通り、それに気付く前に、彼らはここ に来ていたのよ。
- H: どんな類の噂をお聞きになったのですか? ど の位の数の噂がこの辺りに飛び交っていると 考えていましたか?
- M:分からなかったわね。ほら、気付きもしない噂がたくさんあったのよ。
- H: どういう風に噂が発生したかご存じですか? 陸軍の工兵が収容所の土地を測量に来たとか そんな事からですか?
- M: そこから来たのかも知れないわね。ほら兵隊達が流れ込んできて、町には兵隊の姿がたくさん。 そうなってわたし達にも、ここに収容所が造られ、兵隊達はみなそこを見張ったり働いたりし

- ているのが分かったってわけ。勿論、何事も余りにも手早く行われていたので、それがどんな 風に起こったのか思い出せないくらいよ。
- H: あなたは大都会からいらした。かなりコズモポリタンな所からね。そして、あなたが言われるように、小さな町に越して来られた。小さな町は、えてして、とても田舎風ですよね。田舎風である事を示す一つの点は、住民がよそ者に対して少しばかり疑り深いという事ですよね。ローンパインの住民は、人種の異なったそれほど多くのよそ者が自分たちのコミュニティーに入ってきた事について、どんな反応を示しましたか? 住民はそれについてどう思ったのでしょう?
- M:分からないわ。それについて余り考えなかった のじゃないかしら。ただ、その時点で、わたし 達がやらなければならない愛国的な義務の一 つと考えたってとこかしらね―彼らを受け入 れなければならない、で、勿論一分からないわ。 戦争や何やかやでわたし達がそれを当たり前 ととらえていただけにも思えたしね。戦争なら 起きてしまう事の一つに過ぎなかったってわ けよ。当然、それを苦々しく思っていた人もい た一ほら、あんな風に人間を閉じ込めてしまう なんてね。それから、勿論、たくさんの人間が 日本人嫌いだった。うちの娘はまだほんの子供 でね。やっと4歳か5歳くらいね。そんな子供 に、色んなお喋りが耳に入ったので、日本人に 対するとっても変な感情が植え付けられたの ね。わたし達が一度マンザナーに夕食を食べに 行った時に、収容所の中の人達が自分達で育て た素晴らしい食べ物を出してくれたのよ。野菜 やなんか全部栽培していたのね。それを並べて 見せてくれた訳よ。それで、娘にそれを食べさ せる事が出来なかったのよ。娘は、中の人たち が敵だと思っていたのね。口には出さないけど そう思っていたのね。あの人たちは敵だ。だか らあの人たちの食べ物を食べちゃいけないっ てね。娘は、やっと4歳か5歳くらいだったの よ! 娘はそこに座っていたけど、どうやって も娘に食べさせる事は出来なかった。そんな風

に感じていた人達は、たくさんいたと思うわよ、 はっきりとは知らないけど。わたしの考えでは、 多かれ少なかれ、収容所を受け入れるのも仕方 のない事の一つだと、皆がただ当たり前に感じ ていたってとこかしらね。

- H: どんな悪い噂をお聞きになりましたか? いくらかあったと言う人たちもいるんですよ。町の中で。そう、パーセンテージに直せば、あなたの感じたところではどの位になりますか? 25パーセントが、収容所がここに出来るのに反対していた、それとも 10 パーセント、いや 2パーセント? それとも...
- M: いいえ。誰かがそれに反対していたなんて知ら ないわ。思い出す限りはね。恐らくいくらかは いたんでしょう。でも、わたしは、収容所に反 対していた人を思い出せないわね。お話しして いる通り、それが義務だからここに収容所を受 け入れなければならない、当然の事だと思って いたのよ。収容所に嫌な気分を抱いた者もいた でしょうね。だけど、収容者達はわたし達を悩 ましたりしたことはなかったのよ。勿論、収容 所の中の人達は外出を許されていなかった。で も、わたし達は中に入れたのよ。わたし達は 行って、収容所を見る事が出来た。収容された 人達が、全員、どんな風に家から引き離されて この収容所に送られて来たかを見ると一嫌な 気分になったわね。わたしが子供の頃、第一次 大戦中に、みんながドイツ人に対してどんな風 に扱おうとしていたか、あれやこれやを聞かさ れていたものよ。だから、それはただ一分から ないわね。わたしに関する限り、わたしは若 かったし、それがやらなくちゃいけない事だと 納得していたから一もし政府がそうしろと 言ったら、そうするわよ。それに、年配の人た ちは、も少し辛辣だったかもね。それについて、 余り語られたって記憶がないのよ。
- H: 敵意が組織化されたのは、少しも思い出せませんか?
- M: とんでもない。まるっきりそんな事はなかった わよ。それに、誰もが、収容所の兵隊さん達に は、前とは打って変わって親切にしたわ。兵隊

- さん達は、家庭で温かく迎えられたし、あの人 達はみんな一うちのことを言えば、いつでも二 三人よんで夕食をとったり、ただくつろいで 貰ったりしたわ。わたし達が会った兵隊さん達 は、たくさん太平洋の島々に行っていたのよ。 ほら、病気になっていたりしてね。ほとんどの 兵隊さん達が、病気になったり怪我をしたりで ね。程度の差はあれ戦場には出られないので、 ここで勤務をしていたわけよ。それに、調子が 悪いというだけの兵隊さん達もたくさんいて 一だけど、あの人達も日本人の扱い方はとても 良かったわ。
- H:私にとって衝撃だった事の一つは、合衆国の様々な所に 10 のリロケーションキャンプがあった。マンザナー収容所とカリフォルニア北部のツールレーク収容所を除けば、収容者が外出して周辺の町に出かけられた。ところが、ローンパインとインディペンデンスではそうはいかなかった。それをどのように説明されますか?
- M: どうして外出して町に来るのが許されなかった のかは覚えていないわ。けど、みんなが話して いたのは覚えているわ。思い出せる噂では「い いさ、収容者達はいずれ町にやって来て買い物 をしたりするさ」ってね。でも、わたしはそん な風には運ばない事が分かっていました。だけ ど、わたしにも理由は分からないわね―当局が 望まなかったからなのかどうか―実際なかな か大規模な収容所だったから、当局は外出させ たくなかったのかも知れません。わたしには分 からないわ。
- H:収容所の横を車で通り過ぎたことはおありですか?
- M:勿論、何度もね。それに、何度も中に入ったわ。 お話ししたように、わたしにはあそこで働いて いる友人がたくさんいたし、姉も働いていたし、 それに一つまり、入れたのよ。
- H: それじゃ、あなたは収容所との直接のコンタクトがとても多かったんですね?
- M: うーん。そうでもないわ。姉や誰かに会いに行っ ただけだから。それに、これもお話ししたよう

- に、特別なフェアー (fair) みたいなものをやっ た時に三四回ね。手工品や栽培した物なんかを 見せていたのよ。収容者との直接のコンタクト はそれだけかしらね。
- H:周辺のコミュニティーの住民にとってマンザ ナー収容所で雇われるのは、まるで当たり前の 事でしたか?
- M: ええ、姉の働いている事務所ではとてもたくさ ん働いていたわ。どの位かは覚えていないけど、 でもいたわ。幾人かは覚えていないけど、少な くとも8人の娘がいたに違いないわ。それは覚 えている。それ以上いた数については思い出せ ないけど。
- H:全般的な経済的影響については如何ですか? オーウェンス・ヴァレーは戦時中は些か経済的 に不況下にあった。ツーリストが通って行くの が少なくなったためかと思いますが。収容所で の雇用状況は如何でしたか? ローンパイン の経済を上向きにするのに役に立ちました か?
- M:勿論です。収容所のおかげで経済はとても助 かったわ。兵隊さん達は、ほら町に来るのを許 されていた、だから当然このローンパインにお 金をもたらしたのですから、とても助かったわ。 それで、経済の面では、どれだけの数の兵隊さ んがいたか知らないけれど、本当にたくさんい たから、当然ローンパインの町は助かったわ。 インディペンデンスの町もそうだったでしょ うね。
- H: あなたのご主人は自動車に関わるビジネスをさ れていた。そのビジネスに、収容所がそこにあ ることが影響を与えましたか?
- M氏: そうさね。なかったね。我々の商売は殆ど住 民相手だったから、それ程影響を与えられたと は覚えとらんがね。鉱山だの色んなものがあっ たから、我々のビジネスは変わりなかったよ。 尤も、他の時に比べてまるで同じというわけで はなかったろうね。この町の他の商売は、食料 雑貨店も何も、実際潤ったさ。勿論、政府は、 たくさんの物資を運び込んださ。でも、収容所 のおかげで我々は大いに助かったよ。ローンパ

- インに来る者は誰でも一集団で来るしね一少 しは金を費う。兵士達や何かの場合に限っては、 役に立ったさ。と言うのも、政府は必要な物の 殆どをトラックで運び込んだので、収容所自体 からは余り恩恵を受けなかったからなあ。
- H: その当時、ローンパインでは、「政府が日本人 を甘やかしている。政府は一般の国民には配給 になっていた物や食料を豊富に持っている。し かも収容者は明らかにそうしたものを購入す る機会がある」というような噂がたくさんあっ たのではありませんか?
- M: その点では、大して覚えていません。けど、連 中が捨てたと思われたゴミのことは覚えてい ます。我々には、バターも何も配給制でした。 政府は、バターをみんな連中の元に運んで、連 中は屡々捨ててしまう。ほら、駄目にしちゃう んですよ。そんなような事が噂されていたわ。 わたしが自分で見た訳じゃない。耳にしただけ よ。たくさんの人間が実際にそうした状況を不 愉快に感じていたと思うわね。
- H: 1942 年 12 月にマンザナーで起きた暴動のこと は覚えておられますか? 恐らく、リロケー ションキャンプがいくつもある中で最も有名 な (celebrated) 暴力事件の例だったと思います が。そのいわゆる暴動の知らせは、町まで流れ 込んできましたか?
- M:ええ、町の住民はそのことを知っていましたよ。
- H:2名の収容者が殺害されました。収容所の拘置 所の前で示威運動があったと思うのですが、そ こでいかなる理由があれ一
- M: そのことについては微かに覚えているけど、思 い出せる事はそれ程ないわね。
- H: それでは、暴動や暴力的な示威運動の後で町に さーっと広まった恐怖については、何も覚えて おられませんか? というのも、治安維持のた めに憲兵を収容所に入れたからですが。
- M: それはいくらか思い出せるけど、詳しくはねえ。 いえ、思い出せないわ。ジョゼフさんの奥さん ならたくさん覚えているんじゃないかしら。町 で食料雑貨店をやっているし、収容所で起きて いる事について色々耳にしていただろうから。

- H: あなたは収容所に慣れてしまったというところ でしたか?
- M: そうそう。収容所の方で何か起きているという だけでした。気にならなかったわね。収容所に ついて考えていた事さえ思い出せないくらい よ。もう言ったけど、あって当たり前の事に思 えるものだったわね。
- H:この町の住民の間に、戦争が終わって収容所か ら解放されたら日系米人がこの地域に留まる のでは、という恐れはありませんでしたか?
- M: 覚えてないわね。考えた事さえ思い出せないわ。 みんな家に戻るんだと想像していたしね。他の 場所では留まったと聞いたけど、そうじゃない の? ニューメキシコやアリゾナではそう だったの? でも、ここでは、誰も留まらな かったと思うわ。
- H: あなたはあの収容所が必要だったと思われます
- M:わたしには答えようがないわ。
- H:収容所には敵国民もいたが、3分の2はアメリ カ市民だったんですよ。
- M: ええ、それはそう。その時には、そんな事を考 えないのね。今ではそれが分かるんだけど。あ の人達がたくさんのものを失ったのは、とても 恥ずべき事に思えるわ。
- H:政府は何故彼らを収容したとお考えですか? そうした行為にどのような正当化があり得ま すか?
- M: わたしの考えでは、誰が本当のアメリカ人で、 誰が日本人か見極めがつかなかったからじゃ ないかしら。だから、一緒くたにして収容して しまったのね。
- H: あなたがアメリカ市民にして抑留されていた者 がいた事に気づいた時―戦争が終わってから は、あなたも状況をもう少し広い視野で見る事 ができたでしょうから―その事であなた自身 の民主的な制度に対する信頼が幾分でも減じ るという事がありましたか? あなたの市民 権が、危機的状況にあっては単なる紙切れに過 ぎないものになり得ると認めるのは、ぞっとす るような事ではありませんでしたか?

- M: うーん、そうね。その時点では正しい事だった と思えるわ。お話ししているように、今では、 多分正しい事ではなかったと思える。恥ずべき 事でした。あの中に収容されていた善良なアメ リカ市民がたくさんいました。でも、政府なら 自分達のやっている事を弁えている、そんな風 に思ってしまうものでしょう。
- H:仮に政府が彼らを収容せず合衆国本土に日本軍 が侵入していたら、日本人の血を引く者の中に は侵略軍を助ける者がいた、そうお考えです か?
- M: そう考えるわね。
- H: それでは、そうした恐れが、彼らを収容所に閉 じ込めるのに関わりがあったとお考えです か?
- M: ええ、そう思うわ。
- H:この町の住民であれどこか他の土地であれ、日 系米人に対するそれ以降の態度はどのようで したか? 明らかに、彼らは戦前はステレオタ イプ化されていた。さもなければ、収容所に閉 じ込められなかったという感じも持ちます。で も、戦後はどうでしたか? 軍隊に入った日系 米人の果たした役割は、白人など日系米人以外 のアメリカ人にどのようなインパクトを与え ましたか? 勿論、第二次大戦中に最も多く受 勲した442部隊の事を指しているのですが。こ の事は町の中に広まりませんでしたか、そして 幾分一?
- M: ええ、そう思うわ。思い出せる事は余りないけ ど、広まったと思います。ローンパインに関す る限り、日系米人に対する敵意のようなものは 一度もなかったわ。あなた方はこう推測するん でしょう一「奴らは俺達の敵だから、ここにい て欲しくはない」ってね。わたし達はただこう 思っていただけ一「連中はここにいるんだから 受け入れよう」ってね。恐らく、わたし達は、 彼らの内いくらかは敵だろうと感じてはいた。 でも、それでも、善良なアメリカ市民もいると 当然感じもしたのよ。でも、判断するのはわた し達のする事ではなかったわね。
- H: 今年の夏の事ですが、ウォーターゲート事件の

公聴会で、戦時中442部隊に属していたハワイ 選出の上院議員のダニエル・イノウエ議員が、 その場にいた弁護士の一人に「いまいましいち びのジャップ (damn little Jap) 」と呼ばれたの は、不快に感じましたか?

M: ええ、とても不愉快なことだったわ。とても素 晴らしい若い人なんだもの。それには余り同意 できないわね。

H: 昨年の春に、マンザナー収容所の跡地に据えら れた銘板についてはよくご存じですか?

M: それについては読みました。思い出せないけ ど... わたし達は出かけてそれを見ようとし たんだけど、果たさなかった。でも、それにつ いては読みましたし、ほら古い墓地があった所 に行ってみたのよ。尤も、そこをきれいにして 銘板を置いてからは近づいた事がないんだけ

H:この町で銘板に対しての反応は如何でしたか? 新聞記事か何か出ていたのを覚えておられま すか?

M: 新聞に記事は出てたけど、誰かがそれについて えらく活動的だったとは思わないわ。銘板を置 いたのは良い事でした。あの頃、わたし達はこ の町にいなかったから、何が起きたのかははっ きりと思い出せないけどね。でも、反目があっ たとは思わないわよ。

H: 銘板の中の表現にいくつか議論を呼ぶものが含 まれています。ロサンゼルス地区のいくらかの 人達を動転させたものですが。それらについて のあなたの反応を知りたいのですが。一つは、 収容所が「強制収容所」 (concentration camp) と呼ばれている事。今一つは、収容所の存在が 「ヒステリア、人種差別及び経済的搾取」 (hysteria, racism, and economic exploitation)

組み合わせによるものだと非難されている事 です。まず第一に、収容所は「強制収容所」だっ たとお感じですか? マンザナーは強制収容 所だったというのは、正しい言葉遣いだった、 そう思われますか?

M:強制収容所だったという感じがするわ。

H:強制収容所について正確に言って何を思い浮か

べますか?

M: そう、マンザナーがそうであったようなものよ。 あの人達を収容して閉じ込めたんですから。囚 人のようには扱われていなかったけど、フェン スに囲まれていたし、外出を許されていなかっ たんですから。といっても私の意見よ。良く分 からないわ。

H: それでは、その部分はお気に障らないんですね。 収容が「ヒステリア、人種差別及び経済的搾取」 によって引き起こされたという非難について は如何ですか?

M: 多分そうだったんでしょう。

H: 三項目すべてについてですか?

M: 三項目すべてについて、多分ね。

H:外国籍の日本人は収容されたが、ドイツ人、イ タリア人は収容されなかった事については如 何ですか? みな枢軸国側でしたが。こうした 差別的な状況がどうして生じたとお考えです 72?

M: さあ。分かりません。さっぱりだわ。

H: それが多分、あなたが銘板に記載された事に同 意された「人種差別」につながるんですね?

M: そうそう、多分ね。

H: 収容所の建設前に、陸軍はオーウェンス・ヴァ レーに、10,000 人でなく、100,000 人の日系米 人を連れて来るという噂を、何か耳にされませ んでしたか? そうした場合の結果について、 何か狂気じみた噂をお聞きになりませんでし たか?

M: 多分ね。思い出すことは出来ないけど、小さな 町の噂がどんなものか分かるでしょう。多分流 れていたんでしょうけど、思い出すことは出来 ないわね。だけど、恐らく噂はあったでしょう

H: オーウェンス・ヴァレー全体でのみんなの態度 については何かお耳に入っていましたか? 私共はある方にインタビューしたんですが一 これは信頼できる情報源で、マンザナー収容所 の以前の副所長だったロバート・ブラウン氏な んですが一インディペンデンスにおいては、僅 かの住民を代表していただけのようですが自

警団があって、マンザナーに収容されている日本人が侵入して来る可能性を防ぐために民兵隊を組織したという事があったと。それについて何か耳にされた事は?

- M: 覚えてません。あったのかも知れないけど、思い出せないわ。今現在では思い出せないわ。
- H:デイヴィッド・バータニョーリがあなたにおう かがいしたい事がいくつかあるようですので、 インタビュアー役を譲ります。
- B: あなたはご主人のビジネスには少しでも関わっておられなかった?
- M: ええ。全然ね。
- B:マンザナーに収容された最初の収容者のグルー プが乗ってきた車列の事を覚えていらっしゃ いますか? 1,000 人くらいいた、まことに長 い車列でした。
- M: ええ、覚えているわ。
- B: それらの車はオークションで売られました。ご 主人がそれについて何か仰っていたことは? 自動車ディーラーのビジネスをしていたんで すから、そうした車を買うチャンスを活用した んでは?
- M: いいえ、しませんでした。
- B: なるほど。お出かけになったマンザナーでの フェアーには、あなたお一人が招かれたんです か? それとも町中が招待された?
- M:町中よ。行きたい者は誰でも招待されたのよ。
- B:たくさんの住民が出かけましたか?
- M: ええ、あそこの食堂、どういっても良いけど、 食堂は満員でした。みんなが来たのはインディ ペンデンスや―
- B:人数を教えて下さいませんか? ほら、1,000 人か、500人か、100人か?
- M:200 人てところね。確かにそのくらいいたわ。 勿論、何回も開かれたし。わたしの行った時 は一
- B:一日がかりのイベントでしたか?
- M: ええ。収容者達が何をしていたか、何をつくっていたかを見て欲しいわね。で、わたしはそれをフェアーと呼んだけど、多分他の呼び方をした方が良いんでしょうね。それで、色んな展示

- 物を見てから、そう、食事ね。食事は収容者が 用意してくれたんだけど、自分達で育てた野菜 なんかを見せてくれたわ。収容者達がそうした 事をやり遂げているというのが、そのフェアー が開かれた趣旨だったわ。目新しい物の品評会 みたいなものだったわ。
- B: それは日系米人達自身が企画したものでした か? それとも、収容所当局が? そもそも日 系米人達がやって来て宣伝したんですか?
- M: 想像だけど、当局が、収容者達がやっている事 を見せていたのよ。覚えていないけど、わたし の想像ではね。
- B:最後にもう一件大切な点を。戦時中、日系米人 部隊が、つまり 442 部隊ですけど、組織されて から、日系米人の兵士達の幾らかが、町を通っ てマンザナーの両親を訪ねました。あなたは彼 等と接触を持ったり、彼等がローンパインにい る間どのように扱われていたか耳にされたり しましたか?
- M:いえ、覚えてないわ。わたしの記憶では、それについて思い出したのは唯一回、彼等がテレヴィの番組でその事を語った時ね。三四ヶ月前に『バックトゥーマンザナー』とかいう特別番組をやったのよ。その番組では、町を通り抜けて行った兵隊さん達を見せていたわね。でも、わたし自身は誰一人通り抜けてゆくのを見かけた覚えがないのよ。
- B: ばったり会うこともなかったんですか?
- M: ええ。いずれにせよ、覚えていないのよ。
- B:ご自宅に招いてもてなした兵士達は、収容所の 事をどのように話していましたか?
- M: うーん。収容所について余り話した記憶はない わね。向こうも、その事はあまり話さなかった わ。
- B:兵士達が関わった何らかの事件についてご記憶 は?
- M: ないわね。兵隊さん達は余り話さなかったし、 推測だけど、話すべきじゃないとされていたん じゃないかしら。そう、兵隊さん達は余り話さ なかったわね。彼等は外出して暫し町中で過ご せるのをただ喜んでいた、自分達の仕事につい

て語るのには実際に関心がなかった―そう思うわ。収容所に関する事は何にせよ殆ど語ろうとしなかった。それについて思い出そうとするには、わたしにとっては長い長い年月が経ってしまったわ。(笑い)わたしは、余り記憶力が良くないのよ。

H:おかげさまで、とても素晴らしいインタビュー になりましたよ。カリフォルニア州立大学フ ラートン校の日系米人オーラルヒストリープ ロジェクトを代表して、あなたのご協力に御礼 を申し上げます。

M: どういたしまして。

(19) ヒューバート・E・ミラー ヒューバート・E・ミラーとのインタビュー。 Mがインタビュイーのヒューバート・E・ミ ラー、Bがインタビュアーのデイヴィッド・ バータニョーリをさす。インタビューに同席 したミラー夫人 (グラディス・V・ミラー) は、M夫人として表す。

B:ミラーさん。日系米人がマンザナーに着いた時 に、彼らが所有していた車がどうなったか教え て頂けませんか?

M: 私の記憶するところでは、恐らくは少なくとも 2 マイル、ローンパインからマンザナーまで日本人のものだった車が並んでいたよ。どのくらい長く、その車が収容所に置かれていたか覚えていないが、3 週間から 1 ヶ月後には競売に出したかな。

B:政府が競売を行った?

M: そう聞いたんだがね。政府の査定人がやって来て、日本人の所有する車を査定してからそれを売りに出した。と言うより、いくらだろうが、査定した値を、日本人に払ったんだよ。聞いたところでは、車をものすごく安く査定したし、余り宣伝もされなかった。競売が終わるまで、知っている人間は殆どいなかったとさ。

B: その頃は、ローンパインのシボレーの販売店で 働いておられたんですね?

M: その通りさ。

B: それでいて競売の事を耳にされなかった?

M: わしらが知ったのは、競売が終わってからさ。 覚えてるところじゃ、町のフォードのディー ラーが、一二台買ったな。やっこさん、競売の 噂を嗅ぎ付けて一目散さ。ローンパインからマ ンザナーまでたった 6 マイルだよ。

B: その人は、どんな風にして噂を耳にしたか言ってましたか?

M:いいや。恐らく、誰かが収容所に出かけていて、 多分それから町に戻って競売の事を話したん だろう。連中はたくさんの車を売ったそうだし、 残りはブルドーザーで潰してしまったとか聞 いたよ。本当かどうかは知らん。わしが直接 行って見たんじゃないが、そんな風に耳にした んだよ。

B: その当時、収容所が、ローンパインの町の発展 に影響を与えたとお考えですか?

M: いいや。

B: 少しは経済を活気づかせた筈ですが。

M: そう。とても僅かだったろうがね。というのも、 何も彼も不足していたからなんだよ。例えば、 ショーティーと呼んでおった地元でパン屋を 経営していた男がおったが、日本人に対して強 い反感を持っておった。マンザナーで働いてい る白人が町にやって来て、収容所に入っている 日本人の友達のためにパンを買っていこうと する。ショーティーは、その人達が日本人の代 わりに買い物をするのだと気付くと、その連中 を閉め出してしまったものさ。どうしても、 売ってやらんかった。わしの覚えているところ では、砂糖が足りなかった。地元の客に売るだ けの量のパンや菓子しかなかったから、日本人 に少しでも売ってやろうなんぞと考えもしな かった。ショーティーは、そう結論を出して おったんだな。

B:そうした事―単なるやり過ぎだけをさしている んじゃありませんよ―が町ではいくらも起き ていたんですか?

M: どんな時にも起きる事だが、ひどい敵意や悪感情を持っていた者もいくらかおった。だけど、 一般的に考えて一何にせよローンパインの住民は一収容所をハプニングだと受け止めて敵 意はなかったな。ゴムが集められておったんで、 わしらも鉄道の駅にタイヤを積み上げたもの だ。日本人を駅にやって来させて、タイヤを貨 車に積み込ませていたな。10人か20人かの日 本人に白人の監視兵が一人ってところだった。 日本人が脱走するとか恐れていた人間はおら んかった。日本人は、石油備蓄タンクのそばで 働いておったから、マッチを擦ってそこに投げ 入れるとか、やりたかったら爆発させるとか出 来ただろうね。しかし、そこでも何も起こらな かった。だから、住民が神経質になっていたな んて事は、これっぽっちも言えんと思うよ。

B:このローンパインにどのくらい住んでおられま すか?

M:1935年にやって来たんだよ。

B: インヨー郡の全人口を上回る 10,000 人もの日 本人をマンザナーに収容しようとしていると 分かって、初めに何を考えましたか?

M:個人的には、心配はしとらんかったよ。日本人 は軍の監視下におかれるだろうと考えていた し、そこに来ることになったんだしね。日本人 がここに大挙してやって来るといっても、誰も 悩んだりはせんかったよ。

B: あなたご自身は日本人と接触を持たれました か?

M:いいや。わしは、収容所には3度しか入らなかっ た。インターステート電話会社のトラックが、 収容所の中で故障しちまった。それまで、収容 所に足を踏み入れた事はなかったがね。ま、た またまその会社の旧式の T 型フォードの修繕 トラックが出払っていたんだよ。わしが収容所 に入ってみると、連中はわしが銃を持っていな いか身体検査をしたんだ。わしは連中に、銃な ど持っておらんし、その会社のために、エンジ ンをかけに来たんだと言ってやった。ところが、 連中は、監視兵を連れて行かねばならんと言う のさ。馬鹿げてると思ったがね。監視兵をト ラックに乗せて走ったが、こう尋ねてみた。「ど うなってるんだね? この辺り、えらく張りつ めた雰囲気じゃないか」1942年だか1943年だ かの12月7日で、日本人は日本の国旗を掲揚

したがったが、許可されなかった。それで、結 構な小競り合いが起きたのさ。噂では、監視兵 の一人が、ライフル銃の床尾で、収容者の一人 の口のところを叩いたんだとさ。武器庫に行こ うとして、脚を撃たれた収容者がもう一人いた とも聞いたがね。

B:1942年12月に起きた、マンザナー暴動の日だっ たのではないでしょうか?

M: 収容所で暴動の起きたすぐ後、翌日だったよ。 だから、おさおさ油断なくしていたんだろうな。

B: その日は、監視兵はみんな武器を携行していま したか?

M: ああ、ライフル銃をな。 監視兵がトラックに乗 り込んで来た時に、その兵隊も銃を持っていた

B:収容所に入った残りの2回は、どんな機会だっ たのですか?

M:一度は、隣に住んでいたディック・カラスコと 一緒だった。ディックがウエスタントラックラ インズの運転手をしていた時に、農産物や肉を 収容所に輸送していたんだな。とある日曜日に、 彼のトラックに便乗して、あそこにあのでかい 保冷庫を下ろすのを見に出かけただけなのさ。

B: あなたが実際に収容所と持った接触から、日系 米人の収容者に対してどのような意見を抱く ようになりましたか?

M: 合衆国で生まれた日系人の事かい?

B:収容所にいた人達です。

M: うーん、ジャップに手を貸した者もいくらかは いたかもな。でも、多くの者は、きっと手を貸 さなかったろうよ。例えば、兄貴がモンテベロ に住んでいるんだが、マンザナーに収容された 男と知り合いだったんだな―その男の名前は 知らないが、兄貴は、長い間その男と知り合い だったんだ。その男は市場に出す農作物をつ くっていたが、マンザナーに送られることに なっていた。で、車を持ち込んではいかんとい うので、自分の車を兄貴に売ろうとした。この 男は、父親や兄弟二人と喧嘩しておった。自分 はここ合衆国で生まれ育ち、学校にも通い、結 婚もしたし、家族もいる。それで、父親に向かっ

て、日本に行く気など金輪際ないと言ったんだ。 日本に親戚がいるのは分かっておったが、日本 人の習慣や生活様式については知らんかった。 ここがその男の故国で、だから彼は留まってマ ンザナーに入ると言い張った。つまりは、連中 の内いくらかはこの国に留まることにしたし、 我々のやり方を信じておったわけだ。それから、 日本人が攻撃してきたら、手を貸しただろう人 間もいくらかいたのも確かだろう。

- B:形を変えた質問ですが、日本人を全員収容した のが正しかったと思っていますか?
- M: いいや、それが正しかったと思った事は一度も ないね。
- B:ヨーロッパに出陣した日系米人部隊 442 部隊に ついてお聞きになったことはおありですか?
- M:ああ、ウィリアム・バウアーから聞いたな。同じ中隊かどうか分からんが、バウアーが戦争から帰ってきて、我々はどこかで集まりを持ったんだよ。誰かが、日本人について手厳しい事を言ったんだな。バウアーは、あっちで日本人の兵隊達と付き合いがあった―あんたが話しているのと同じ連中かも知れんな―で、バウアーの意見では、日本人のやってのけたことから考えて、日本人に勇敢さでかなうのは殆どおらんという事だ。
- B: それでは、442 部隊は、その当時のあなたの意 見を好ましいものにした?
- M: そう、アメリカ人だった人間には好感情を持っ たな、うん。わしらの生活様式と国家に賛成な ら、日本人に悪意などこれっぽっちも持たんよ。
- B: ミラーさん。あなたは、1973年の4月にマン ザナー収容所跡に設けられた記念の銘板には 通じておられますか?
- M: いいや、知らんな。遠くから眺めたことはある んだが。わざわざ行って読んだことはないな。
- B: 銘板の二語が、議論をよんだのですがね。それで、マンザナー収容所のような収容所が強制収容所 (concentration camp) であると述べている部分へのあなたの反応はどうかとお尋ねしたいのですが。あなたは何度か収容所に足を踏み入れ、収容所の展開についてもよく知るように

- なった、その限りで、あなたは、マンザナーは 「強制収容所」だったという表現に納得されま すか? あなたは、マンザナーが、あなたの感 じる強制収容所であったとお考えですか?
- M:あんたが強制収容所をどう定義しているのか分からないのでな。確かに連中は、あそこに収容されたんだが、わしには、強制収容所の定義が分からんでな。強制収容所ではどんな事が起こり、実際に何を意味しているかだがね。わし自身は入れられた事がないから、何とも言い様がない。わしが聞いた呼び名は、いつでもマンザナー収容所(Manzanar Internment Camp)だったよ。
- B:銘板の下の方にある、「ヒステリア、人種差別、 経済的搾取」(hysteria, racism, and economic exploitation)がないまぜになって収容所が出来 たのだとする表現にもまた議論が色々とある んです。あなたは、その表現が、当時の状況の 公平な評価だとお考えですか?
- M: どう答えていいのか分からないな。うん、部分 的には、人種差別だったろうさ。
- B: どうやら、収容所を閉じた後、たくさんの物が 売りに出されたらしい。そうしたセールに加わ りませんでしたか? 例えば、何かを買ったと か?
- M: ああ、家内とわしで、そこで売りに出された建 物を一軒買ったよ。白人が住んでいたと言われ ていた一日本人の住まいではなかったよ。ロー ンパインの様々な人間が、何軒か買ったよ。半 分にして、その侭町に持ってきたんだ。ウイ ロゥモーテルが3軒、エルマー・シュレーダー が買ったランチモーテルが2軒買ったかな。 ローンパインドラッグストアを昔持っていた ベン・ベーカーも、一軒買ったはずだな。ロサ ンゼルスから来た人間達も多分8軒は買ってい る。連中はロサンゼルスに運んでゆくつもり だったんだな。ところが、解体しちゃいかんと 言われた。連中は、わしらがやったように半分 にして移動させるわけにはいかんかった。それ で、パングボーン地区、まあ人によっちゃノー スローンパインと呼んでいるが、こっちで始末

しちまったんだが、今でもウイロゥモーテルに 残っているよ。その連中が買った内の3軒がバ スター・スィングローヴァーとドン・ブランソ ンに又売りされて、今でもウイロゥモーテルに 残っているってわけさ。



ウイロゥモーテル

- B:そのバラックは幾らぐらいで求められたんです か?
- M:わしの記憶では、いくらで買ったかというと、 ローンパインに運んでくる費用は別として、 900 ドルくらいだった。200 ドルか 300 ドルで 買うべきだったんだ。はっきり言える訳じゃな いが、ベン・ベーカーが始めて買ったのには 250 ドルしか払わなかったと聞いたよ。
- B:で、あなたは結局 900 ドルで購入された? ローンパイン地区では、収容されていた人間の 方が、明らかにある種の物資を一時には配給と なっていた物資を手に入れられたというので、 敵意があったという噂がずっとありますね。戦 時下だというので、オーウェンス・ヴァレーの 住民には入手できなかったものをね。ミラー夫 人、そうした状況へのご意見をうかがえます か?
- M夫人:そう、その通りよ。収容所の中には店があって、戦争中ずっとあたし達にはまるで手に入らなかった物を、収容されていた日本人には買えるようにしていたのよ。長い間あたし達にはバターが手に入らなかったのは覚えている。そうしたら、誰かの撮った写真がロサンゼルスタイムズ紙に載って、その写真ではトラック一杯のバターがそこじゃ駄目になっていたのよ。間違

- いなく日本人には殆どいつでもバターがあったってわけね。勿論、あたしは、収容所のみんながバターを手に入れていたかどうかは知らないけど、店で買えたのよ。収容所には、お茶や煙草もあったわ。どれも、収容所の外では珍しかった物が色々ね。
- B: あなたはしょっちゅう収容所に行かれていたんですか?
- M夫人: しょっちゅうとは言ってないわよ。でも何度も出かけたし、その店で買い物をしたのよ。 こちら側に住んでいて、収容所を訪ねた際に物 を買ってきた人間を他に何人も知っているわ。
- B:収容所が解体された時に、町の人の中に、日本 人収容者がオーウェンス・ヴァレーに残ってし まうんではないかという恐れがあったかどう か、ご記憶でしょうか?
- M夫人:いいえ、そんなことを耳にしたことは思い 出せないわ。聞いていたけど忘れちゃったって 可能性はあるわよ。でも覚えている限り、残り たがっている人はいなかったわね。多分、元々 やって来た南の方に帰りたかったでしょうね。 でも、あそこに収容されていた人達は良い人達 だったと、本心から思うわ。収容所内の「交流 の日」(Reciprocity Day)に出かけた時にも、殆 どの人達が良い人達だったわ。尤も、こんな大 きな企画を行っていた晩に、一度だけ、収容者 の側にかすかな敵意が潜んでいると感じた事 がありました。
- B:収容者達が企画を行い、地域の人達を招待した んですか?
- M夫人: ええ。娘はその頃まだ小さかったけど、娘をトイレに連れて行きたかったのね。でも、みんなが壁みたいに立ちはだかってわたしを通そうとしないのよ。ちょっと、狼狽えてしまったわ。その人達が少しも動いてくれない内に、婦人用トイレの列がしっかり出来てしまってね。その辺りにいたのは女の人達だけで男の人達はいなかったわ。わたしは通り抜けられなかったんで、結局列の後ろの方に行って並んだわ。でもそんな嫌な思いをしたのはその時だけよ。収容所で挨拶した人達は殆どが気持ちの良

い人達だったわ。

B: ミラーさん。奥さん。カリフォルニア州立大学 フラートン校の日系米人オーラルヒストリー プロジェクトを代表して、御礼を申し上げます。



ローンパイン収容所配置図

考察と結語

A: インタビュイーについて

ポーリーン・ミラーは、1906 年生まれ。インタビューは、1973 年 12 月 20 日に、カリフォルニア州ローンパインのノースジャクソン 330 番地で行われた。35 分のテープなどが残されている。

ヒューバート・E・ミラーは、1905 年頃生まれ。 インタビューは、1973 年 10 月 4 日に、カリフォル ニア州ローンパインで行われた(その先の住所は不 明)。25 分のテープなどが残されている。

姓は同じであるが、夫婦ではない。どちらも、収容所建設時に30代半ばであった。インタビュー中にあるように、比較的 moderate な見方をしている。

・ポーリーン・ミラー: あなた方はこう推測するんでしょう―「奴らは俺達の敵だから、ここにいて欲しくはない」ってね。わたし達はただこう思っていただけ―「連中はここにいるんだから受け入れよう」ってね。恐らく、わたし達は、彼らの内いくらかは敵だろうと感じてはいた。でも、それでも、善良なアメリカ市民もいると当然感じもしたのよ。で

も、判断するのはわたし達のする事ではなかったわね。

・ヒューバート・E・ミラー: そう、アメリカ人だった人間には好感情を持ったな、うん。わしらの生活様式と国家に賛成なら、日本人に悪意などこれっぽちも持たんよ。

B:「ジャップ」について

次いで、「ジャップ」発言であるが、本稿では、ポーリーン・ミラーのインタビューの中で、インタビュアーのアーサー・ハンセンが、「今年の夏の事ですが、ウォーターゲート事件の公聴会で、戦時中442部隊に属していたハワイ選出の上院議員のダニエル・イノウエ議員が、その場にいた弁護士の一人に「いまいましいちびのジャップ(damn little Jap)」と呼ばれたのは、不快に感じましたか?」と問うている。また、ヒューバート・E・ミラーとのインタビューの中で、ミラーが、「うーん、ジャップに手を貸した者もいくらかはいたかもな。でも、多くの者は、きっと手を貸さなかったろうよ。」と答えているが、この場合には、「ジャップ」は、「日本軍」を指して使っている。

本書の Jap Camp (『ジャップの収容所』)という書名が、圧力によって Camp and Community に変更を余儀なくされた事は、アーサー・ハンセン教授が述べているところであるが、renaming について、以下に興味深い事例を紹介する (インターネットで日系米人関係の情報には繁くアクセスするよう努めているが、この事例に関連してここで紹介するのは、何百とある記事の中の3件に留める。年月日は、アクセス時点や更新時点を指すのではなく、あくまで記事そのものの日付である)。

1-1) 2006 年 8 月 14 日付けの在ヒューストン日本国総領事館の邦文 HP では、「平成 18 年度外務大臣表彰受章者決定」として、テキサス州関係では、スペースシャトル「ディスカヴァリー」に搭乗した野口聡一氏と並んで、サンドラ・チカコ・タナマチ夫人が表彰されたとアナウンスしている。内容は、次の通りである。

【・サンドラ・タナマチ氏は、テキサス州にある 「ジャップ・ロード」という 蔑称が付けられた 道路 の改名運動を始め、困難に立ち向かいつつも全米か ら支援を取り付けてその道路の改名を成し遂げま した。

- ・日系市民連盟(JACL) ヒューストン支部の理事 として、日系人の地位向上と日米関係の友好促進に 貢献されました。
- ・24 年間の教員生活を通じ、日系3世としての 自身の経験を踏まえ、人種差別の危険性や異文化交 流の重要性を子供たちに伝えてきました。その功績 から、これまでに優れた教員が受ける数多くの表彰 を受章しています。】
- 1-2)在ヒューストン日本国総領事館の英文 HP を見ると、説明は詳しくなる。

【日系三世のタナマチ夫人は、生まれも育ちもテ キサス州。1992年以来、夫人はテキサス州ボーモ ントにある通り「ジャップロード」(Jap Road)の 名を改めるようキャンペーンを展開してきたが、地 元の役人や住民の大きな抵抗にあった。改名を求め るキャンペーンの間、夫人は、脅迫や嫌がらせ、罵 詈雑言や経済的圧力に耐えてきた。2001年には、 トマス・クワハラ氏と力を合わせる事になった。氏 は、ルイジアナ州生まれのベトナム帰還兵だが、サ ンアントニオに向かう途中偶然通りの標識を見か けたのである。二人は、5人からなる委員会を組織 し、全米的規模で圧力をかけるキャンペーンに乗り 出した。キャンペーンは、ビル・クリントン大統領 を始めとする実力者からの支持を得た。2004年7 月 19 日に、長い聴聞会の後、ジェファーソン郡コ ミッショナー会議は、全員一致で「ジャップ」ロー ドの名の変更に賛成投票をした。この勝利は、 フォートベンド郡やオレンジ郡における、同様な通 りの標識を変えさせる事に結びついたし、後には、 「テキサス州におけるいかなる公共施設や機関に おいてもいかなるエスニシティに対する中傷も禁 ずる」という立法に結実した。】

註1:テキサス州ジェファーソン郡は、2000年の国勢調査では、人口252,051人。内アジア系が7,274人居住する。ジェファーソン郡の中にボーモント(2000年の国勢調査では人口113,866人)があり、さらにその郊外にファネット(2000年の国勢調査では人口105名)がある。註2:オレンジ郡は、カリフォルニア州のそれではなく、テキサス州のオ

レンジ郡である。

2) 次に、「テキサスの"ジャップロード"は消えるべきだ―7月19日の公聴会に向けて請願書に署名を求める」と題した、2004年7月13日付けの JACLのHPの記事を紹介する。

【テキサスのボーモントの近く、ジェファーソン 郡にジャップロードと呼ばれる通りがある。 「ジャップロード」という名前は、この地に入植し た日系移民の功績を称えるものだと言われる。我々 は、この名を「恥辱」であると断言する。この地の 歴史では、およそ100年前に日本からの移民がテキ サスにやって来、いくらかはボーモント地区に入植 した。彼らが開拓し耕し、テキサスを米作州にした のだ。彼らは、学校や教会を建て、コミュニティー に貢献し、やがてその一部となった。この通りは、 巷間伝わるところでは、そうした先覚者を称えて名 付けられたというが、日系米人社会は、称えられて いるとは感ぜられない。1993年に、地元の日系米 人の住民が名前を変えようと言うキャンペーンに 乗り出したが、他の住民はそれを拒んだ。日系米人 の住民は、改名する権限を持っているのは、正式に 郡コミッショナー会議のみだということに気付き、 懇請した。しかしながら、ジェファーソン郡コミッ ショナー会議は、「「ジャップロード」というのは 人種的中傷ではなく嘗てこの地に住んでいたマユ ミ一家を称えているのだ」という主張をまげない地 元住民の好みを優先した。我々は、それを「侮辱」 ととる。何年にもわたって、山ほどの手紙、その中 には (テキサス州のものとは限らない) 上下両院議 員からのものも含まれているのだが、手紙が届き、 郡コミッショナー会議に嘆願がなされたが、この尊 厳を傷つける名は残った。1986年7月28日に、連 邦議会は、「ジャップ」という語は人種的に不快感 を与える語であり、いかなる連邦所有の土地・建物 にも使用を禁ずると述べた議会決議 290 を発した。 しかるに、ボーモントでは、この侮辱的な名が残っ た。今年初め、テキサスの「失われた大隊」(Lost Battalion) (第 36 テキサス師団に含まれる) の退 役軍人達が、ジェファーソン郡、オレンジ郡の郡コ ミッショナー会議に向けて、第二次大戦中に彼らを 救うために、困難をものともせず、ある者は生命を 失い、ある者は肢体不自由者になった、日系米人の みからなる 442 部隊への賞賛の証として、「ジャッ プロード」と「ジャップレーン」(Jap Lane)の名 を変えるよう促す書状を送った。それでも、恥辱は 残ったままだ。到頭いくらかの動きがあった。何故 「ジャップロード」が改名されなければならないの かについての意見を述べるために、全ての関係者、 当事者が、テキサス州ボーモントで7月19日(月) にコミッショナー会議の審問会で意見を述べるよ う招集された。たくさんの関心を持つ市民がこの審 問会に参加するだろうし、我々としては、コミッ ショナー会議のメンバー達に、改名を迫っているの が地元のコミュニティーに留まらず、全米的な支持 があるのだという事を示してやりたいのだ。 「ジャップロード」という名は、その土地に住み、 アメリカ合衆国のために闘い、地域社会を築くのに 貢献した日系米人達の記憶を汚すものだ。「侮辱」 に抗議し、コミッショナー会議を動かしてこの恥ず べき通りの名を変えさせよう。7月18日まで有効 だが、以下の請願書に署名をお願いしたい。7月19 日の審問会に提出される事になる。[以下、請願書

3) 最後に、2004年8月7日付けの nwasianweekly.com の記事を紹介しておきたい。

【我々は、テキサス州ファネットの不快な

「ジャップロード」の名を変える事に費やした努力

が、この地域の日系移民の遺産をまるで無視した新

しい名になってしまった事に失望している。市民達

の HP が記されている] 】

は、投票によって、10年前に廃業したテキサス州 南東部の有名なナマズ料理の店にちなんで、この 4.3 マイルの通りを「ブーンドックス通り」 (Boondocks Road) と名付けたのだ。「ジャップロー ド」の名は、元々1900年代初頭にこの地に入植し た稲作農家を称えるために名付けられた。郡コミッ ショナー会議は、今週初めにブーンドックスを承認 してしまった。我々が先月、コミッショナー会議に よる「侮蔑的で人種差別的な「ジャップ」という名 をとり除こう」という決議に拍手を送っただけに、 この新しい名には落胆している。日系米人の活動家 達が名前を改めさせようと闘っている間に、何度も 何度も、「ジャップ」という言葉をとり除いてしま

うのは町の歴史の一部を消し去るのと同じだと言 われたものだ。しかし今となっては、この地に稲作 を持ち込んだマユミー家の遺したものを保存する のに関心のない者が、そうした市民の中には多数い る事がはっきりした。投票したジャップロードの住 民 170 名の内、100 名以上が、Mayumi Road、Japan Road、Japanese Road といった選択肢もあったのに、 Boondocks Road を選んだのだ。

新しい名を選ぶ仕事に任命された者の一人の ウェイン・ライトは、今週ロイター通信にこう語っ ている。「彼等(日系米人)は11年間も我々を攻 撃してきた。彼等もそこから何かを学んで欲しい。 この件については、勝者はいないんだ」また、ライ トは、住民の中には Mayumi の発音ができない者も 多いからとして、新しい名前を擁護している。

ライトの発言に苦々しさをかぎとるのは難しい 事ではない。町の住民は、ポリティカル・コレクト ネスのために通りの名前を変えさせられる事に面 白くない気分を味わってきた。それで、彼等は、町 の歴史を示しながらも、同時に抗議する者達の要求 にたやすく屈したようにはどうやっても見られな い名前を選んだのだ。

そうした些事に関わる必要はあるまい。

たくさんの者が、この何十年もかかったジャップ ロードの退屈な長話 (saga) が到頭決着し、今は新 しい名になったと思っている。ただ、我々はそうと は言えないのではと恐れている。テキサスのこの町 の住民と日系米人社会との間の緊張は、直ぐにも消 えるわけではあるまい。年月が傷を癒すだろうか? まだ、判断がつかないところだ。

尤も、日系米人の活動家達は既に、住民や訪問者 がこの地域においてのマユミ一家を始めとする日 本人農民の貢献を思い起こすことが出来るような 「歴史を表す標識」を建てる計画を提案している。 道路標識が無理なら、こうした標識が次善の策と言 える。我々が希望しているところだが、それは、来 るべき世代にとっての教育的な手段ともなるだろ う。我々が以前に述べたように、ジャップロードと いう名を変えさせるために長い間闘ってきた JACL ヒューストン支部や国中の無数の人々におめでと うと言いたい。ある集団全体を貶めるような言葉遣

いが、道路標識に現れてはいけない。だから、そうした道路標識が取り除かれたのは良い事である。ただ、この町がマユミー家の遺した物さえも取り払わねばと考えた事については、悲しみを覚えるのみである。】

テキサスの日系人は、人口の1%に満たないが(テキサス州の日系人は、1990年の国勢調査では15,172人)、入植の歴史は古い。1900年頃、ヒューストン商業会議所と日本の総領事との話し合いの場で、稲作技術の向上のために日本人の協力が懇請された。1903年には、サイバラ氏率いる30家族が入植し、その地域の稲作は劇的な改善を見せた。1914年まで、入植者が日本から次々とやって来た。第二の波は、1920年頃で、これはカリフォルニアの反日感情を逃れてやって来た日系人であった。

さらに、大変良く知られている挿話であるし、2) の JACL の HP の記事にも顔を出すが、1944 年 10 月 30 日、442 部隊が、「失われた大隊」と呼ばれたテキサス大隊(第 36 師団 141 連隊第 1 大隊。テキサス州兵を中心に編成)を救出している。211 名のテキサス大隊を救出するために、そのほぼ 4 倍が死傷したという激しい戦闘であった。ちなみに、サンドラ・タナマチ夫人のおじも、第二次大戦で戦死している。テキサスと日本人、日系人との関わりは薄くはないのである。

(2006.9.15)